

# 『福翁自伝』を読む —日本の近代化と福澤論争— (その4)

2013. 3. 9

準備考察 資本主義的経済—西欧列強のアジア進出の原動力—

## 1. 西欧列強のアジア進出のなかの日本・福澤

### ① 福澤の大阪時代 (1855 3 ~ 1858 10)

1855 3 緒方洪産の適塾に入門 1856 9 兄三之助急死、福澤家の家督を継ぐ 同日母の許しを得て洪産のもとへ、適塾内塾生となる、以後 猛勉強、1857 秋 適塾塾長となる、1858 8 江戸藩邸内の蘭学塾教師への就任要請があり、10 中津藩鉄砲州中屋敷に塾を開く

### ② 西欧列強のアジア進出と日本

1850 アヘン戦争、1853 6 ペリー軍艦四隻をひきいて浦賀に来航 同7、ロシア提督ブチャーチン軍艦4隻をひきいて長崎に来航 国書をさしたず、1854 3 日米和親条約締結 同7 英国東インド艦隊スターリング来航 攘夷の風吹き荒れる、1858 4 井伊直弼 大老に就任 同6 日米修好通商条約調印、同9以降 一橋派の活動家の逮捕→安政の大獄 (吉田松陰 橋本左内ら処刑)

## 2. 資本主義的経済とその論理

### ① 資本主義的経済とは

- ◇ 商品経済 貨幣経済 貨幣の資本への転化
- ◇ 資本・賃労働関係で生産が行われている経済
- ◇ 一方の極に資本 (生産手段の貨幣形態)
- ◇ 他方の極に賃労働者

### ② 原始的蓄積

- ◇ 最初の資本形成→産業資本は如何にして形成されたか
- ◇ 一番はやいのはイギリス→解放説と暴欲説
- ◇ 賃労働者はいかにして形成されたか
- ◇ 産業革命は資本主義的経済の青年期
- ◇ 日本の原始的蓄積は明治以降、賃労働者も明治以降形成された

### ③ その論理

- ◇ 企業レベルでは利潤の極大化を国家レベルでは国富 (GDP) の極大化を追求する。
- ◇ そのためには生産した商品が売れなければならない。商品市場の追求 (商品輸出)
- ◇ そのためには安く安定した原材料の確保が必要。原料の確保
- ◇ 西欧列強の海外進出のベースにはこの二つの論理が少なからず作用した。
- ◇ 1880年以降になると、さらに、資本輸出の論理が加わる。自国の資本を植民地に輸出するのである。植民地支配競争が激化するのはこの段階からである。資本主義的経済はこの段階からいわゆる「帝国主義経済」に突入する。1904段階になると資本主義的経済を発展させた日本も列強の仲間入りして、植民地支配への方向を打ち出してくるのである。

# 『自信』に則して

## 1. 本日の蘭学修業の始り。

ソコで大阪に来て緒方に入門したのは、これが本当に蘭学修業の始まり、始めて規則正しく書物を教えて貰いました。その時にも私は学業の進歩が随分速くて、塾中には大勢書生があるけれども、その中ではマア出来の宜い方であつたと思う。 P. 50

## 2. 実父同様の緒方先生。

先生が見舞に見えまして、愈よ陽望扶斯に違いない、本当に療治しなければ是れは馬鹿にならぬ病氣であると云う。夫れから私はその時に今にも忘れぬ事のあると云うのは、緒方先生の深切。「乃公はお前の病氣を吃と診て遣る。診て遣るけれども乃公が自分で処方することは出来ない。何分にも迷うて仕舞う。此の薬彼の薬と迷うて、後になって爾うでもなかつたと云て又薬の加減をすると云うような訳で、仕舞には何の療治をしたか訳けが分らぬようになると云うのは人情の免れぬ事であるから、病は診て遣るが執匙は外の医者に頼む。そのつもりにして居れと云て、先生の朋友、梶木町の内藤数馬と云う医者に執匙を託し、内藤の家から薬を買つて、先生は只毎日来て容体を診て病中の養生法を指図するだけであつた。マア今日の学校とか学塾とか云うものは、人数も多く逆も手に及ばない事で、その師弟の間は自から公なものになって居る、けれども昔の学塾の師弟は正しく親子の通り、緒方先生が私の病を見て、どうも薬を授るに迷うと云うのは、自分の家の子供を療治して遣るに迷うと同じ事で、その扱は実子と少しも違わない有様であつた。後世段々に世が開けて進んで来たならば、こんな事はなくなつて仕舞ましょう。私が緒方の塾に居た時の心地は、今の日本国中の塾生に較べて見て大變に違ふ。私は眞実緒方の家の者のように思い又思はずには居られません。ソレカラ唯今申す通り実父同様の緒方先生が立会で、内藤数馬先生の執匙で有らん限りの療治をして貰いましたが、私の病氣も中々軽くない。煩い付て四、五日目から人事不省、凡そ一週間ばかりは何も知らない程の容体でしたが、幸にして全快に及び、衰弱はして居ましたれども、歳は若し、平生身体の強壯なその為めでしょう、恢復は中々早い。モウ四月になったら外に出て歩くようになり P. 50 & 51

## 3. 「死生の事は一切言ふことなし」。

1856年9月兄三三助病歿。意。口が叔父と絶ぐ。口は中津へ歸す。あつめる気はない。中津を抜け出し、大阪にもどる。東

を考ふる。之ヲ以テ、母親の説得にあたる。母親は「死生の事は一切  
 口には言はず」と云ふ。口を閉ぢり出す。

ソレカラ私は母にとくり話した。おッ母さん。今私が修業して居るのは斯う云う有様、斯  
 う云う端梅で、長崎から大阪に行て修業して居ります。自分で考ふるには、如何しても修業は  
 出来て何か物になるだろうと思う。この藩に居た所が何としても頭の上る氣遣はない。真に朽  
 果つると云うものだ。どんな事があつても私は中津で朽果てようとは思いません。アナタはお  
 淋しいだろうけれども、何卒私を手放して下さらぬか。私の産れたときにお父ッさんは坊主に  
 すると仰しやうたそうですから、私は今から寺の小僧になつたと諦めて下さい。その時私が  
 出れば、母と死んだ兄の娘、産れて三つになる女の子と五十有余の老母と唯の二人で、淋しい  
 心細いに違いないけれども、とくり話して、「どうぞ二人で留主をして下さい、私は大阪に  
 行くから」と云たら、母も中々思切りの宜い性質で、「ウム宜しい。」アナタさえ左様云て下さ  
 れば、誰が何と云ても怖いことはない。「オーそうとも。兄が死んだけれども、死んだものは  
 仕方がない。お前も亦余所に出て死ぬかも知れぬが、死生の事は一切言うことなし。何処へで  
 も出て行きなさい。」ソコで母子の間と云うものはちゃんと魂胆が出来て仕舞て、ソレカラ愈  
 よ出ようと云うことになる。

P. 56

4. 家財と云ふ40兩の借金を返済する P. 57 ~ 58。老母と娘

残つて大阪へ向ふ心算

兄の死後、間もなく家財は残らず売却して諸道具も  
 なければ金もなし、赤貧洗うが如くにして、他人の来て訪問て呉れる者もなし、寂々寥々、  
 古寺見たような家に老母と小さい娘とタツタ二人残して出て行くのですから、流石磊落書生も  
 是れには弱りました。

P. 64 ~ 65

5. 築城書と抄写する。奥平屋敷、和蘭新版の築城書(函館五稜郭)

その時は丁度ペルリ渡来の当分で、日本国中、海防軍備の話が中々喧しいその最中  
 に、この築城書を見せられたから誠に珍しく感じて、その原書が読んで見たくて堪らない。けれ  
 ども是れは貸せと云た所が貸す氣遣はない。夫れからマア色々話をする中に、主人が「この原  
 書は安く買った。二十三両で買ったから」なんと云うたのには、実に貧書生の胆を潰すばかり。  
 逆も自分に買うことは出来ず、左ればとてゆると貸す氣遣はないのだから、私は唯原書を眺  
 めて心の底で独り貧乏を歎息して居るその中に、ヒョイと胸に浮んだ一策を遣て見た。「成程  
 是れは結構な原書で御在ます。逆も之を讀んで仕舞うと云うことは急な事では出来ません。責め  
 ては函と目録とでも一通り拝見したいものですが、四、五日拝借は叶いますまいかと手輕に触  
 って見たらば、「よし貸そう」と云て貸して呉れたこそ天与の僥倖、ソレカラ私は家に持て歸  
 て、即刻驚筆と墨と紙を用意してその原書を初から写掛けた。凡そ二百頁余のものであつた  
 と思う。それを写すに就ては誰にも言われぬのは勿論、写す処を人に見られては大変だ。家の  
 奥の方に引込んで一切客に遇わずに、昼夜精切り一杯、根のあらん限り写した。

P. 60

## 6. 緒方洪庵の許に砲術修業し中津と出て再び大阪へ

是れまで私は部屋住だから、

外に出るからと云て届も願も要らぬ、颯々と出入したが、今度は仮初にも一家の

主人であるから願書を出さなければならぬ。……、出掛けに蘭学の修業に参りたいと願書を出すと、懇意なその筋の人が内々知らせて呉れるに、「それはイケない。蘭学修業と云うことは御家に先例のない事だと云う。「そんなら如何すれば宜いかと尋れば、「左様さ。砲術修業と書いたならば済むだろうと云う。「けれども緒方と云えば大阪の開業医師だ。お医者様の処に鉄砲を習いに行くと云うのは、世の中に余り例のない事のように思われる。是れこそ却て不都合な話ではござらぬか。「イヤ、それは何としても御例のない事は仕方がない。事実相違しても宜しいから、矢張り砲術修業でなければ済まぬと云うから、「エー宜しい。如何でも為ましようとして、ソレカラ私儀大阪表緒方洪庵の許に砲術修業に罷越したい云々と願書を出して聞済になって、大阪に出ることになった。大抵当時の世の中の場梅式が分るであろう、と云うのは是れは必ずしも中津一藩に限らず、日本国中悉く漢学の世の中で、西洋流など云うことは仮初にも通用しない。俗に云う鼻掴みの世の中に、唯ベルリ渡来的一条が人心を動かして、砲術だけは西洋流儀にしなければならぬと、云わば一線の血路が開けて、ソコで砲術修業の願書で穩に事が済んだのです。

P. 62 s P. 64

## 7. 先生の大恩

1856年11月 高野内塾生(書生・復讐)となる

大阪着はその歳の十一

月頃と思う、その足で緒方へ行て、「私は兄の不幸、斯うく云う次第で又出て参りましたと先ず話をして、夫から私は先生だからほんとうの親と同じ事で何も隠すことはない、家の借金の始末、家財を売払うた事から、一切万事何もかも打明けて、彼の原書写本的一条まで真実を話して、「実は斯う云う築城書を盗写してこの通り持て参りましたと云た所が、先生は笑て、「爾うか、ソレは一寸との間に怪しからぬ悪い事をしたような又善い事をしたような事じゃ。何は扱置き貴様は大造見違えたように丈夫になった。「左様で御在ます。身体は病後ですけれども、今歳の春大層御厄介になりましたその時の事はモウ覚えませぬ。元の通り丈夫になりました。「それは結構だ。ソコでお前は一切聞て見ると如何にしても学費のないと云うことは明白に分ったから、私が世話をして遣りたい、けれども外の書生に対して何かお前一人に鼻負するようであつては宜くない。待て。その原書は面白い。就ては乃公がお前に云付けてこの原書を訳させると、斯う云うことにしよう、そのつもりで居なさいと云て、ソレカラ私は緒方の食客生になって、医者の家だから食客生と云うのは調合所の者より外にありはしませぬが、私は医者でなくて只翻譯と云う名義で医家の食客生になって居るのだから、その意味は全く先生と奥方との恩恵好意のみ、実際に翻譯はしてもしなくても宜いのであるけれども、嘘から出た誠で、私はその原書を翻譯して仕舞いました。

私は是れまで緒方の塾に這入らずに屋敷から通つて居たのであるが、安政三年の十一月頃から塾に這入て内塾生となり、是れが抑も私の書生生活、活動の始まりだ。

書生の生活  
酒の悪癖

P. 65 s 66